

## ◆令和4年度を迎えて◆



学校法人中村学園

専門学校静岡電子情報カレッジ

静岡福祉医療専門学校

理事長・校長 中村 徹

まずは、桜花爛漫のこの良き日に専門学校静岡電子情報カレッジ37期、静岡福祉医療専門学校25期の入学生、また、進級した学生諸君、おめでとうございます！！

今年も年初から「新型コロナ変異ウイルス」デルタ型、オミクロン型第6波とBA-2系統第7波となりつつある。1日も早い感染収束を期待し、我々も普通の生活に「予防」、「3密を避ける」、「5つの場面を回避する」等の最大限の認識に、努力と協力をお願いしたい。

そのような中、令和4年度も感染防止対策を考慮しながら4月6日(水) 新入生及び在校生前期オリエンテーション開催、講義は2,3年生4月7日(木)、新入生4月14日(金)より対面形式と一部学内・外リモート併用にて予定通り開講、入学式および始業式は予定通り4月9日(土)に学外の会場にて時間短縮の上、挙行する。

そして、気候も急に温かな春が来たと思しや、「寒の戻り」で寒い日も続く、三寒四温のこの時期、「新型コロナウイルス」感染症対策とともに体調管理には十分留意し、この一年が皆にとって有意義な学校生活となることを祈念します。

さて、この4月は民法改正により学生諸君が全員成人となりおめでとうございます。今まで以上に成人としての確固たる自覚を持ち、今後の人生の糧となる職業に就くための就学に当たり、しっかりした「目標」を立て、学校生活においては学業を通して、日々の努力から「自己実現」を図るんだ、という強い心構えを確認しなければならぬ時期なのです。

そして、新入生はこれまでの学校生活では義務教育的に与えられた学習から、これからは本学から提供される「学びの場」で、自分自身の意志と意欲で「自ら学ぶ」のです。学内環境では講義、演習、実習などで、試行錯誤の中からそのプロセスを学び、学外では「産学連携教育プログラム」のインターンシップ、ゼミナール、施設実習・臨地実習、卒業研究、ケアスタディなどのプログラムからも「こだわり」を持って、「自ら考え、カタチにすること」を身につける。これが社会に出てからの問題発見・解決力や壁を乗り越えることのできる皆の

「底力」となるのです。

要するに、学校生活を有意義におくり、「なりたい自分になる」ためには、この時期に自己の「キャリアデザイン」のイメージを確認し、この具現化を図るために、「こだわり」をもって、「自らが学ぶ姿勢」にかかっているのです。

また、遠く母国を離れ、志を抱き入学された留学生の皆さん、言葉や文化、風俗習慣、環境が異なる土地で就学に勤しみ、生活は慣れないことが多いと思いますが、前向きな姿勢で日本の人々との交流を通して意義深い学生生活を送ってください。

そして、社会人入学された皆さんには、就学への強い意欲に敬意を表すとともに、どうぞ今後の人生における多様な生き方の糧を得ることを期待します。

## 1. 学校生活に確固たる目標を持つ！！

皆が学ぶこのキャンパスは、極めて恵まれた環境にある。JR静岡駅南口から徒歩数分、通学やアフタースクール、フィールドスタディ等と学生生活の範囲を広げるのに便利な立地条件だけでなく、学内ネットワークや諸処の最先端施設・設備、バリアフリーキャンパス。この中で「友情を育み」、「なりたい自分になる」という素晴らしい目標達成に向けての努力に期待する。

本学創立者の教育理念である高い理想に基づく「挨拶を基調とした全人教育」は、本学園教育の根幹をなすものです。学校生活においては学習を通じて、社会においては仕事を通じて「自己実現を図る」という教えをしっかりとし身につけ、このような教育理念を掲げる本学で学ぶことに「誇り」と「これだけのことをやったんだ！」という「自信」を持って就職活動に、社会に己を売り込んでください。

## 2. 新入生御殿場宿泊オリエンテーション

「なりたい自分になる」ために本学の学生としての心構えの徹底と一人でも多くの「心の友」をつくることを目的とする。

本学の「全人教育」と「よりよい就職をするために」の具現化に向け、2泊3日の研修を通して、学生間で本学への入学目的を確認し合い、その達成を誓い合う。この目的を同じくする仲間同士でのオリエンテーション活動の成果は、今後、目的達成のための学校生活とするのです。

また、人生における人的財産となり、お互いに切磋琢磨できる「心の友」を、この専門学校生活の中で一人でも多くつくり、「友情を育み」大切にしてほしい。

「朋友は 我が喜びを 倍にし、悲しみを 半ばにする」

これからの君たちの日々の生活が、「感動」を求め、「充実感」、「達成感」ある生活であることを期待する。

## 3. 我々を取り巻く社会的背景 時代は大きな転換期を迎えている

さて、私たちはこの2年以上に亘り新型コロナウイルス感染症の蔓延に見舞われ、大変な不便さを余儀なくされてきました。人々の行動は制限され、経済は急激な縮小を強いられている状況にあります。本学においても、一昨年当初から新生活様式による学校生活により、入学式や新年度オリエンテーションだけでなく、就職活動をはじめ当たり前のことが当たり前前にできない大変な新年度のスタートを切ることになりました。授業形態も実習・演習は可能な限り対面授業で、講義授業は日課変更や自宅履修により国試受験には事欠かない履修環境整備、また施設実習は受入施設が半減また直前に実施施設変更を余儀なくされたが、立ち止まることなく感染防止と教育活動の両立を目指してきました。

そして、このコロナ禍「新生活様式」は社会のDX化を加速させ、世界的なインターネットが生み出した膨大な情報を、AI技術によって社会が活用していく新たな社会像が提起され、価値がモノから情報に移り、情報資本に立脚した社会への転換が起こるとされてきました。皆がこれから活躍する社会は、デジタルを活用し、AIによる情報を価値化することで優位な競争力を生む社会です。

ゆえに、我々がこの社会で生きていくためには、これらの変化への対応力と多様性への適応力を身に着け、「新たな知識を常に取り入れていくこと」：ブラッシュアップが日々の生活の中に求められているのです。

ダーウィンは「進化論」の中で、「最も強いものが生き残るのではなく、賢い者でもなく、唯一生き残ることができるのは変化できるものである」と言っている。

これから進み行くべき社会は、人口減少・少子高齢社会にAI、IoTなどの高度な技術革新の成果と、「こころ」という人間の本質的特性との共存時代です。



#### 4. 目指せ！CAN スカラシップ

##### 学生リーダー養成「ヒトづくり」と「経済的支援」

本学校訓にある「“Why” 人間の育成」の具現化のため、学内・外の「自分磨き」の様々な活動を通して、「コミュニケーション力」「対人スキル」「問題発見解決力」「先見性」「洞察力」「発想力」「統合力」「情報分析力」等を身に付け、「自ら考え、問題解決」でき、社会の組織の中で一歩前に出てリーダーシップが発揮できる**変化への対応力と多様性への適応力を身に着けた人材養成を目的とした制度**です。活動内容により学内・外活動を評価された**N-CapA**と学内活動中心の**N-CapB**に選考されます。詳細は「学生の手引」を参照。我こそはと思う学生はクラス担任に「CAN スカラシップ 自己推薦文」を添えてエントリーして下さい。

学業・学校生活等を考慮して選出されます。

#### 5. SDGs：「持続可能な開発目標」を、みんなの生活に取り込もう！

(令和3年度「贈る言葉」より再掲)

2015年9月193加盟国参加の国連サミット満場一致で採択されたSDGsは、「誰一人取り残さない」をスローガンに2030年までに地球上の全人類が達成すべき「17」の世界的目標と「169」の達成基準ターゲットに「232」の指標(達成目標値)からなる国際的な開発目標を示したものです。政府、自治体、学校といった公的機関での推進のみならず、企業の社会的責任の方向性の決定や投資・融資先の選定にもSDGsの取り組みが大きくかかわる時代となりました。

なぜ、わずか5、6年の間に、ここまでSDGsが世界的な潮流となったのか。

昨年度を振り返っても、新型コロナウイルス感染症まん延2年目に突入し、テレワーク、ワクチン接種に拠り所を求めた。2021年1月アメリカでバイデン新政権誕生、レジ袋有償、大谷翔平の二刀流に沸く！、熱海の土石流(盛り土問題)、アメリカやオーストラリアでの大規模な山火事、7月東京2020オリンピック・パラリンピック開催、東南アジアの大洪水、オセアニアの大地震・津波、10月日本で岸田新政権誕生、2022年1月北京冬季オリンピック・パラリンピック開催、ロシア侵攻ウクライナ危機 など

近年の世界各地の紛争、自然災害、感染症のまん延などにより、今まで当たり前だった経済成長、さらには経済活動そのものが、何の前触れもなく、一瞬に停滞し、明日には仕事を失うかもしれないという現実を、同時多発的に世界規模で経験してきた。

これは、国、性別、年齢、宗教、所得に関係なく誰にでも日常的に起こりうるもので、私たちは、どのようにしてそれらの深刻なリスクのもとで持続的な発展を遂げていくことができるのか。

この疑問に対する回答がSDGsを通じて見えてくるところに、急速に世界的な潮流となっている根拠があるのです。

SDGsは、法的拘束力を持つものではありませんが、世界中の人々が課題の解決に参加して、地球の未来に貢献する取り組みなのです。

SDGsの基本理念は「誰一人取り残さない」、「我々の世界を自らが変革すること」であり、その重要性を理解し、皆一人ひとりが社会の一員として、あらゆることを「自分のこと」として考え、取り組んでいく姿勢を持つことが大切なのです。今まで、私たちが「かわいそうだ」と共感するようなことがあっても、どこか「他人ごと」として真剣に考えることがなかったさまざまな課題を、SDGsは「自分のこと」と位置づけさせ、行動に移させる力を持っているのです。

まずは、みんなのできる範囲で、今日からできることを探してみましょう。例えば、簡単なことで、「食べ物を無駄にしない」、「電力の消費を抑える」、「コンビニには再利用袋」というような自分の心がけを持ち、自己改革を重ねてゆくのです。

もう少し深掘りしてみますと、今から50年前の1972年世界の科学者組織ローマクラブは「このままの人口増加、環境汚染、資源の使用が続けば、100年以内に人類の成長は限界に達する」というシナリオを提示した。また、1985年気候変動の国際会議で「21世紀半ばには人類が経験したことのない規模で気温が上昇する」という見解を発表した。

このように、科学者はその時々社会に対して警告を発してきましたが、残念ながら社会を変えるまでに至らなかった。社会はそれらの課題を認識しつつも、人類の経済成長を優先したのです。

しかし、この地球社会崩壊に警笛を鳴らし、立ち上がったのが、1992年地球サミット(国連環境開発会議)での、当時12歳のカナダのセバン・スズキさんが「どうやって直すかわからないものを壊し続けるのはもうやめてください。私たちが愛しているのならどうか行動してください」と訴えた。また、2019年、当時16歳のグレタさんが国連気候行動サミットで目に涙を浮かべ、自然破壊の現状を「30年以上、科学ははっきりと示してきたのに、あなたたちは、お金のことと、経済発展がいつまでも続くというおとぎ話ばかり。よくもそんなことが言えますね！」まだ記憶に新しいスピーチです。

このような若者たちの悲痛な叫びによって、従来の経済成長システムがいかに自然に負荷をかけていたのか、次世代に大きな代償を払ってきたのか、認識することとなった。

これらの若者の声から、気候変動による北極海の氷山の解氷でやせ衰えるシロクマ、胃の中がプラスチックだらけで打ち上げられたクジラ。これらの声なき声に私たちはどのように答えることができるのか。今こそ、本当の「私たちの幸福」とは何かを考え直す最後の機会なのではないか。人類の進むべき新たな方向性を地球規模で見出さなければなりません。

SDGsは、今を生きる地球人のすべての人々のため、これから生きてゆく次世代のため、地球上のすべての生物のため、そして地球そのものの存続のため、今の私たちが成し遂げなければならない目標です。

あなたが得た正しい情報と、それに基づく正しい信念で、あなた自身が心地よさを求めていく必要があります。一人ひとり、少しずつでも、異なる行動が相互に影響し合っ一つ共同体を作り上げた時、「誰一人取り残さない」というSDGsのメッセージが必然的に達成できているはず。この言葉の意味を、そのために私たちができることをみんなで真剣に考えなければならないと切に願います。新型コロナウイルス感染症による世界経済の停滞を目の当たりにして、そこに将来への希望を見出し、新たな生活様式を模索しているみんなは、SDGs第一世代なのです。

2025年「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに大阪万博が開催されます。

若者の創造力によって、SDGs成功につながる万博としたいものです。

この「17の大目標」とその目標に向けての「169のターゲット」、そのターゲットに向け投げかけられた達成すべき「232の指標(達成目標値)」から、各学科毎に自分達に課せられた目標である「自分たちの職業観」を「17の目標」に置き換えてみよう。

そして、「自分たちの職業観」を「17の目標」または「169のターゲット」または「232の達成目標値」を用いて表現してみよう。

